俳諧四季花合
種彦作
国貞画
花五画

後撰

三十八編上

延宝四年撰 至来集 定貞の句に「名も似ぎと月こそ光九行雲」とゝ
るゝ和歌の謠をやつし名も似ぎと其形を雛ぜり。又近く安永九年
の作 隣塵夜話 の序に「女郎の実と玉子の四角は魚物と歌ひ行雲
いと丸く四角る五徳が出来重宝とのひゝ云云」と見え延宝より其百余年
暗合の同論わり。今は座敷の行燈は丸い物のやうに心え箱火鉢でつゝふ五
徳は角る物と定まりは専ら流行れ目よ訓ゝ故也ゝ。此草紙は光氏が
大将髭と海老の尾のやうに割ゝは亀戸の案ゝ。初めの程は異る髪と
おのれまで思ひゝが絵画羽子板押絵の類開帳庭の納め物又吉原の
軒燈籠図扇いとより煎餅形。悪心此次安と写まに目訓怪き髪の風
ともいふ無い前よりあげくゝ家二箇器の論の止ゝに是同画の流行せゝ功
るべゝ。それにひれて自然拙作も源氏とゝ名も似ぎとゝ誹るもうす
らぎのよく末まで續んゝと角る五徳を孫へに假我身勝自を如斯

柳亭種彦誌

源氏三十八編
二

つゞき ことにきさめれがちうきくらべそめぬ [illegible]
うのくかとはぞをとかくにきそう文光氏お [illegible]
母君のめかハ光氏ぎ父のくらゐのまゝ [illegible]
うちこもをさせんとねらひとりしが [illegible]
くそれどもは一夜なきのとぞのすきの [illegible]
[illegible]

とうこの二ト まかにのめのむこかうきぐうの
ゆうはさきをならふぞてかかゆくうち
おぼえきゝ今ひとしー
きのかおぼつかきこ見てし
あひーあらうき玉琴よ
身ふそうて八谷三へ
継母のくぼきそうぞー
さらくおもひれ
どうそそとゆー
まさなふかうくれゝる
のりてもふちまちの手をも
[illegible]

[illegible]

仙鶴堂藏板目録

宇寶節用千金藏　大全書狀案文

源氏百人一首宝文庫　女用文章色紙染

御家正流　子供案文

柳亭隨筆　還魂紙料　初編既刻　二編近刻

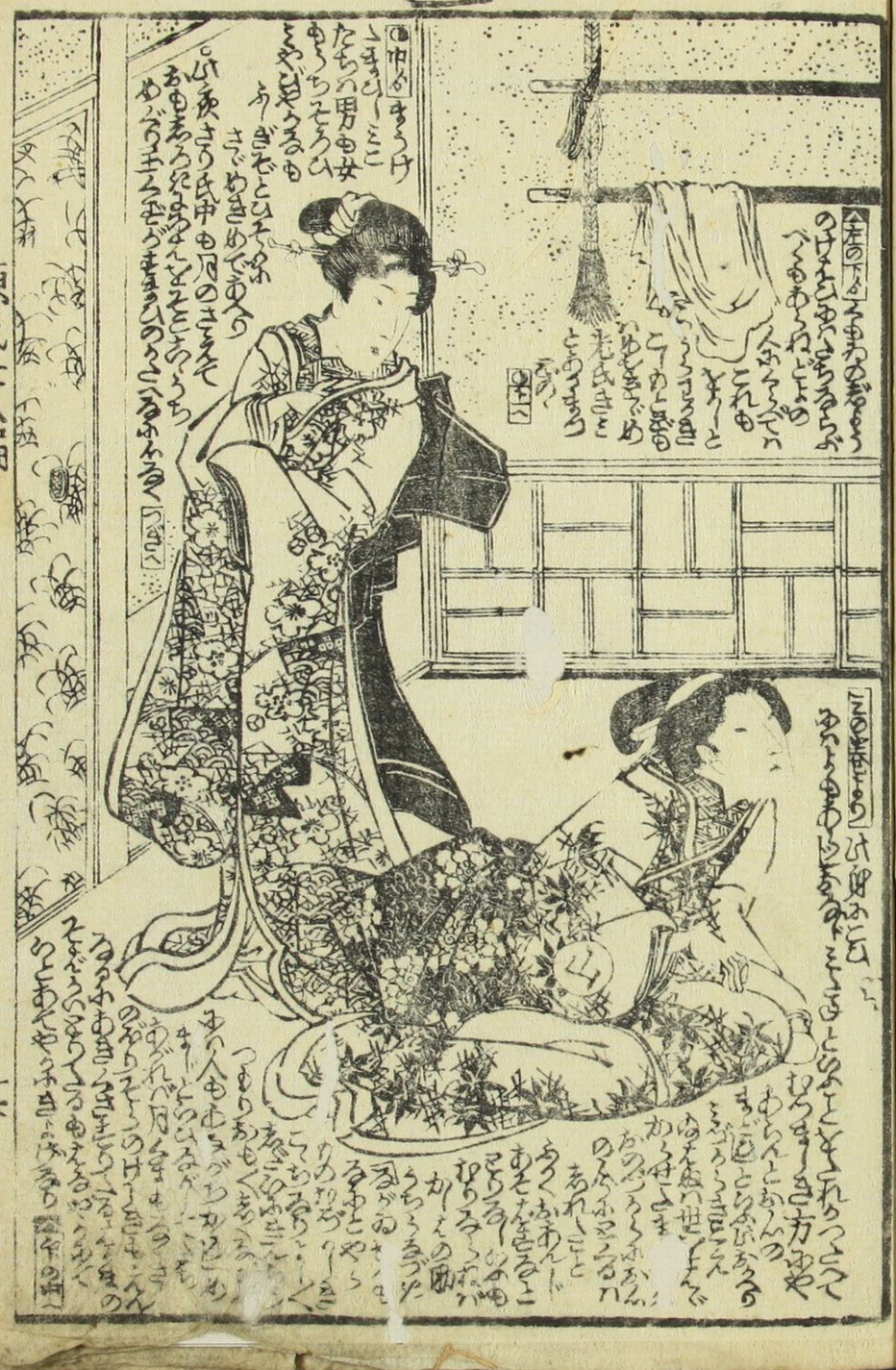
田舍源氏　文彩の加ゑ　上仕　廿八編目録書より　廿九編略ごとく　中なの仕　略ごとく　風流の所　多　ゑ　ゑ　ゑ

三十八編下

三十、海士母
源氏
猪名野
小倉山
山雀業切

三
五
玉葛
祖母
小てはの服脱
加茂の社

柏
神



柳亭隨筆
用捨箱
三冊影成

つゞき
中上ろ
中下ろ
中下ハ
中下ニ
中下ホ
中下ヘ
中下ト
井

國貞画 種彦作

一色彩京紀廉の女 浄瑠璃 上冊柳枝 下冊金川

巻衣

○義太夫のとくり

あつらへ出板 二十九編八 まきたらの巻 ろり

天保十三年壬寅春新彫

自文政十二年巳丑
至天保十五年壬寅十四箇年繪草紙

偐紫田舎源氏

柳亭種彦作
歌川國貞画

三十八編 ゆそ義たるまの巻そそろ核柱梅枝まつぎ 四十二編 まき出板
柳亭去夏より秋クけそ病氣のそそろ氏箇所 漸くに快氣仕
はる草稿出来次第右五帙八冊乃遠用板仕ル 仙崔堂敬白

婚禮雛形 鴛鴦物語 山東京山作 初編四冊二編四冊 歌川國貞画

金澤万八笑増談 松竹園秀山作 五編六冊 貞秀画

南鳴馬町三丁目西側 美艶仙女香 黒油美玄香 製所 坂本氏 取次

書物錦繪 團扇地紙 問屋 江戸通油町 鶴屋喜右衛門